

博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	富山直人（兵庫県）
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	乙第10号
学位授与の日付	平成28年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学 位 論 文 名	古墳時代社会の諸変革 一人・もの・情報の流れを通して一
論 文 審 査 委 員	主 査 奈良大学 教授 坂井秀弥 副 査 奈良大学 准教授 豊島直博 副 査 近つ飛鳥博物館館長 白石 太一郎

【論文内容の要旨】

第I章 古墳時代と基礎社会一人・もの・情報の流れを通して一

第II章 古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉

第1節 播磨における古墳時代中期の政治変動

第2節 播磨における古墳時代の集落

第3節 摂津・河内の集落と流通経路

第III章 横穴式石室の導入と対外交渉

第1節 横穴式石室内部の利用実態とその変化過程

第2節 芝山古墳の検討

第IV章 横穴式石室と地域間交流

第1節 前方後円墳への横穴式石室採用動向

第2節 前方後円墳への石室導入後の状況

第V章 原始から古代へ国家成立への発展段階

第1節 大和における石室分布の実態と時間的变化

第2節 大和周辺地域における実態の確認

- 第3節 群集墳の動向と父系制社会
- 第4節 石室の移入の実態とモデル化
- 第5節 石室伝播からみた社会関係の実態
- 第6節 社会復元に向けて
- 第7節 まとめ

第VI章 国家形成過程

第I章「古墳時代と基礎社会」では、請求者は古墳時代社会に関する理解の現状を再整理する。従来の研究では、古墳時代は再分配経済の範疇で理解される場合が多かった。しかし、請求者がフィールドとする播磨地域の遺跡に即してみた場合、古墳時代の集落は防御設備に乏しく、日常的な緊張関係が看取されない。古墳に観察される王権の強い存在感に比べ、集落ではそれがほとんど実感できない。そこで請求者は、集落遺跡からは見えない当時の社会を復元すべく、民族誌の研究成果を援用する。近年、再評価が進むG. タルドの「模倣論」を参考にすると、個人に注目した社会の復元が可能となる。タルドによれば、軍事的強制権がない社会におけるリーダーとは、日々本人の努力が要求され、その地位は世襲制とはならない不安定なものである。請求者は、古墳時代とはそのような社会段階にあると想定する。さらに、本章で食料の獲得と広域ネットワークからみた古墳時代社会についても言及している。

第II章「古墳時代中期の古墳と集落からみた対外交渉」では、播磨を中心とする集落遺跡と古墳から、社会の発展過程、政治的中心と周辺地域の関係について論じる。まず、第1節「播磨における古墳時代中期の政治変動」で、請求者は播磨の古墳から出土する埴輪を分類し、独自の編年を行う。さらに、副葬品や長持形石棺の変化も加味し、播磨の古墳時代中期を3段階に時期区分する。それを王権との関係に当てはめ、第1段階とは古墳時代中期の王権にとって播磨が交通の要衝であった段階、第2段階は播磨独自の渡来系要素が顕著に認められる段階、第3段階は王権の中に徐々に再編成される段階と位置づける。これらの段階は、当時の王権の対外交渉のあり方に対応すると理解する。その上で、前方後円墳から円墳や方墳に墳形が変化しても、一律に古墳築造に対する「規制」と理解すべきではないと提言する。

第2節「播磨における古墳時代の集落」では、請求者は播磨における渡来人の動向に着目し、集落内部の変化を検討する。まず、鉄器生産などの手工業生産では專業制が認められないことを明らかにする。また、建物規模など集落内部の格差は不明瞭で、古墳時代中期を通じて社会格差は小さかったと理解する。さらに、従来は重視されてこなかった淡路島の集落遺跡に着目し、古墳時代の瀬戸内海における流通経路が複数回にわたって変化したことを論じる。いっぽう、塩生産や玉生産、祭祀遺跡の広がりも検討し、5世紀前半と後半に生産や流通の画期が存在することを論じる。

第3節「摂津・河内の集落と流通経路」で、請求者は視点を畿内中枢地域の摂津と河内へ拡大する。まず両地域の集落構造を分析し、各集落は特定の集団が規模を拡大したのではなく、複数の集団が定められた範囲に近接して居住する状況を明らかにする。そこから、集団自体が人口増加によって成長するのではなく、複数の集団が相互に協業するような社会関係を想定する。古墳時代中期の集落には、巨大前方後円墳に象徴される顕著な階層構造が確認できず、社会格差はむしろ限定的であると結論づける。

第III章「横穴式石室の導入と対外交流」では、請求者は古墳の埋葬施設である横穴式石室を素材に、古墳時代後期へと分析を進める。第1節「横穴式石室内部の利用実態とその変化過程」で、大阪府芝山古墳をはじめとする近畿地方における九州系横穴式石室の遺物配置に着目する。それらは、大和で一般

的に認められる百済系横穴式石室の遺物や木棺の配置とは異なることを明らかにし、さらに、配置の変遷から百済系と九州系が融合する過程を描き出す。

第2節「芝山古墳の検討」で、請求者は明治年間にウィリアム＝ゴーランドが踏査、報告した芝山古墳について、今日的な視点から再報告を行う。まず、大英博物館所蔵資料を綿密に調査し、芝山古墳の横穴式石室内における遺物出土状況を復元する。また、兵庫県内の横穴式石室を再度分析し、播磨から丹波に至る内陸経路上に九州系横穴式石室が分布することに注目する。その結果、瀬戸内海から大阪湾へ至る主要な交流ルート以外に、副次的な内陸経路が存在することを明らかにする。経路の多様化が王権の変動にも関わると主張し、その象徴的な存在が摂津の巨大前方後円墳、今城塚古墳と考える。大陸系石室と九州系石室の分布から、畿内の政治勢力は淀川グループと大和川グループに大別でき、両者の対等な競争関係から、その後の社会発展が展開すると指摘する。

第4章「横穴式石室と地域間交流」では、横穴式石室という墓制を通じて古墳時代後期の社会を解明するための基礎作業を行う。第1節「前方後円墳への横穴式石室採用動向」で、畿内で最初に横穴式石室を導入するのは大阪の北摂地域であり、続いて大和へと伝播し、やがて大和で継続的に築かれることを明らかにする。こうした伝播の様相から、淀川グループと大和川グループの対立は後者の優位に決着したと考える。前方後円墳築造の時代とは、墳丘規模や副葬品の多寡に示される量的格差の時代であるが、古墳そのものは支配・被支配の関係を直接的に示すものではなく、築造に参画する人間同士の関係性や、集団の帰属性の表象と理解する。

第2節「大和周辺地域における実態の確認」では、大和、河内の横穴式石室の形態が周辺地域にいかなる影響を与えているのか、形態に着目して検討し、石室築造に関する技術や情報の流れを明らかにする。

第5章「原始から古代へ国家成立への発展段階」では、ここまでの横穴式石室に関する議論をまとめつつ、古墳時代後期の社会全体について検討を加える。第1節「大和における石室分布の実態と時間的変化」では、独立首長墳から群集墳へ横穴式石室が伝播する様相について具体例から検討する。また、第2節「大和周辺地域における実態の確認」では、横穴式石室の構造分析によって大和の動向を整理し、大和内部においても中心地域から周辺地域へ石室構造が拡散する状況を解明する。

第3節「群集墳の動向と父系制社会」において、横穴式石室の埋葬原理を復元し、2棺埋葬から多数埋葬への移行時期を探る。さらに、人骨の研究成果を援用し、MT85～TK43 型式期に社会が双系制から父系制へ移行したと推測する。第4節「石室の移入の実態とモデル化」では、摂津までの領域を中心である大和に対する「周縁地域」ととらえ、播磨は「外縁地域」と理解すべきことを主張し、横穴式石室構築に関する情報の流れをモデル化する。第5節「石室伝播からみた社会関係の実態」では、横穴式石室の各地への伝播状況から、TK209 型式期を画期として石室構造や構築技法に関する情報が制限されたことを想定し、古墳時代の特徴であった量的格差からの脱却という大きな社会の転換を指摘する。

第6節「社会復元に向けて」では、畿内においては淀川、大和川の2系統並立段階から社会の重層化が進むものの、播磨ではそうした動きが見られないことを指摘し、社会の発展のあり方は地域によって異なることを論じる。第7節「まとめ」では、ここまで論じてきた時間軸を①2 系統並立段階、②それらが融合する段階、③父系制に移行し、社会集団の構成が安定する段階と整理する。それを古墳築造と関連させ、有力者が拮抗する社会段階が発展を遂げ、最終的には格差を表示する古墳築造から脱却した状態に至ると理解する。6世紀の列島社会とは、大和のような前国家段階ととらえるべき社会、在地首長制と理解される吉備や上野などの社会、さらに、いち早く父系制社会に移行した北部九州など、様々なレベルが混在する社会であると結論づける。

第VI章では、これまでの考古学的分析を改めてまとめるとともに、1990年代以降の国家形成論を整理する。請求者は7世紀における前方後円墳の消滅に、社会発展の大きな転換を見出している。

【審査内容の要旨】

本論文の要旨は上記のとおりであるが、これに対する審査委員会委員の意見をまとめると以下のとおりである。

本論文は、請求者が長年フィールドとしてきた播磨を主な舞台に、集落、横穴式石室の莫大なデータと分析を積み上げ、古墳時代社会のあり方を論じた労作である。これまで古墳時代研究においては、おもに古墳から社会のあり方が論じられることが多かったが、本論文においては、それに加えて、発掘調査により膨大な蓄積がある集落遺跡について詳細に分析していることがまず特筆できる(第II章)。たとえば、古墳時代における文物と情報の流通・伝達のルートについては、従来、瀬戸内海から大阪湾と大和川・淀川水系が重視される傾向にあったが、本論文においては、大阪湾の西方に横たわる淡路島における遺跡の動向に着目し、瀬戸内・淡路・和歌山ルートが存在を指摘した。大阪湾沿岸には5世紀を通じて古市・百舌鳥古墳群が展開していることから、大阪湾の重要性は保持されていたと思われ、瀬戸内・淡路・和歌山ルートの占める位置づけについてはさらに検討を要するが、これまであまり注目されることがなかった淡路島の動向を含めた考察は、あらたな見方として高く評価される。このほか、播磨地域の古墳時代の集落遺跡の様相においては、古墳における大型前方後円墳に象徴されるような階層性が認められないとすることも興味深い指摘である。

つぎに、横穴式石室についての分析において重要な視点を提供していることがあげられる(第III・IV章)。請求者は長年に亘って横穴式石室を研究テーマとしており、本論文においては、畿内及びその周辺地域における多数の横穴式石室を網羅的に集成したうえで、詳細にその分類と編年が行われており説得力に富む。そのなかで、初期の横穴式石室として特徴的な九州系横穴式石室に着目し、播磨と丹波における姫路市丁古墳群、加古川市剣坂古墳、状覚山古墳、篠山市井原至山古墳、亀岡市医王山古墳などの分布から、明石海峡を通らない内陸ルートの存在を指摘した点は、新たな視点として高く評価される。また、横穴式石室の構造と時期の分析にもとづいて地域間の伝播と交流を論じている。畿内周辺地域においては、横穴式石室の築造に関する情報伝達が不十分な状況がみられることから、強固な国家的領域が形成されていないことを指摘する。須恵器による年代比定においては追葬や再利用などを考慮する必要があり、また、横穴式石室の構築方法が国家領域の問題にそのままつながるかどうかはなお検討の余地があるが、横穴式石室の詳細な分析がこのような多様な観点を提供することはまちがいないであろう。

さらに、横穴式石室に関する分析を総合化しながら、国家成立に至る発展段階に言及していることは評価される(第V章)。請求者は国家以前と国家を分かち指標として親族構造を重視し、横穴式石室の埋葬原理から親族構造を読み解く。すなわち、単次葬から多数埋葬への変化を父系制社会の成立と理解する。これまで、古墳時代の親族構造は古墳に残された人骨や歯牙を手がかりに、形質人類学的立場から論じられることが多かった。いっぽう請求者は、副葬品の配置や棺の位置から親族構造を読み解こうとしており、分析対象を飛躍的に拡大できる意欲的な試みといえる。多数埋葬が父系制社会を示すことについては、なお他の観点から検証する必要があるが、重要な指摘といえよう。

以上のとおり、本論文は、畿内地域に加えて、播磨を主とした畿内周辺地域における古墳と集落遺跡の分析から、古墳時代社会のあり方を本格的に論じたものである。従来の横穴式石室の研究は、畿内中心に進められてきた側面が強く、その一方で各地域においては地域史的研究に陥りがちであった。これ

に対し、本論文は畿内と周辺地域の両者に軸足を置き、双方のあり方を有機的に結びつけて総合的に論じた点は高く評価される。種々の分析を通じ、淡路・和歌山ルートや内陸ルートなど、従来まったく指摘されてこなかった交流ルートを見い出した点なども、斬新な成果として高く評価される。

その一方で、個々の考古資料の解釈と、そこから導き出される結論等には論旨の飛躍が認められる点もある。また、図版等の体裁にも若干の改良の余地がある。これらの課題に対し、請求者のさらなる研究の進展に期待するものである。

【最終試験の結果】

富山直人の博士学位請求にかかる最終試験については、審査委員会の坂井秀弥（主査）、白石太一郎（副査）、豊島直博（副査）の3名があたった。各審査委員は学位請求論文を熟読・検討した上で、平成28年1月7日、本学大学院棟において、博士論文審査公聴会に続いて、学位請求論文と英文要旨をもとに口述試問の形で行った。その結果、富山直人が博士の学位を受けるに十分な学識を有することを確認した。

【審査結果】

審査委員会は、学位請求論文の審査結果、及び最終試験の結果から、本論文は博士（文学）の学位を与えるにふさわしい業績と判断する。